

大谷大学図書館所蔵『大乘五蘊論聞書』(二)

箕浦 暁雄

一 はじめに

本稿は、大谷大学図書館が所蔵する『大乘五蘊論聞書』の翻刻であり、「大谷大学図書館所蔵『大乘五蘊論聞書』(一)」(『大谷学報』第九十五号第二号、二〇一五年)の続篇である。ここに翻刻したのは、第一に『大乘五蘊論』という論書のタイトルの解釈、第二に「五蘊」というときの蘊(*skandha*)の意味、第三に『大乘五蘊論』冒頭に置かれる「世親菩薩造」「唐三藏法師」「如薄伽梵」の文言について講ずる箇所である。

二 『大乘五蘊論聞書』翻刻(十五丁左四行目―二十五丁左四行目)

凡例

- ・本書には丁数が記されていない。内題が記されている頁(二丁左)から順に丁数を付し、翻刻文中「」内に記した。

- ・旧仮名遣いは原文のままに留めた。また、敢えて表記の統一をはからない。
- ・口述筆記という性質上、当て字、略字、合字などが多々使用されている。断りなく適宜改めた。
- ・断りなく適宜現行の漢字に改めた箇所がある。
- ・読者の便宜をはかり、翻刻者が適宜句読点や中黒を補う。
- ・仏典名に『』を付すなど、翻刻文中の一切の括弧の類いは翻刻者による補いである。また、翻刻文中の註記もすべて翻刻者による。
- ・明らかに表記の誤りだと認められる箇所、表記を改めた方がよいと思われる場合には当該箇所の右横に註記した。

・破損等により判読できない箇所には、およその字数に相当する□を記した。

〔十五丁左四行目〕

△『大乘五蘊論』等五門分別ノ中第四ニ解論題号此中ニ初正解題目此ハ『大乘五蘊論』ノ五字ノ題号ヲ解釈イタスナリ。⁽¹⁾此中初二直解后通^レ妨、先直ニ解スルニ、又初二教釈后ニ合解此教釈合解ト云ハ『対法疏』一十五左『大乘阿毘達磨雜集論』ト云題目ヲハ初ニ廣ク教釈シ后ニ略シテ合解スルト云ニヲ以テ解シテアル。教釈ト云ハ教ト離教義ヲ五字ツ、イテアルヲ一ツツ、離シテ解スルユヘニ教釈ト云此カ

〔十六丁右〕

常ニ申ス離釈ノコトナリ。又合釈ト云ハ常ニ六合釈ノコトナリ。先初二五字題号ヲ離教シテ解釈スルニ「大乘」ノ二字ハ慈恩一家ニ於テハ无性『乘論』⁽²⁾ノ二釈ニヨル。彼論一卷初左「亦乘亦大故名大乘」⁽³⁾ト云此カ一釈テ則持業釈

ノ義ニ、或「乗性大小」故名「大乘」此ハ第二釈テ、此ヲ解スルニ惣シテ二解カ別レル。則有財ト依主ノ二解ナリ。⁽⁴⁾
 爾レハ大乘ノ名ニ二尺三解有ナリ。先初ノ「亦大亦乗故大乘」トハ持業釈ノ義テ、此ハ菩薩ノ六度万行ノコトヲ大乗ト名ク。乗ト云ハ運載ノ義テ、行者ヲハ不分乗菩薩涅槃ノ彼岸ニ至ルノ義「亦大」ト云ハ二乗小乗ニコトナリテ廣大无边万界ノ有情ヲ利益

〔十六丁左〕

シテ自利ハ他ノアマ子キ処ロヲ「大」ト云コレ六度万行ハ衆生ヲノセハコフ乗ノ義モアリ。又廣大ノ義モアリ。六度万行ノ体ニ亦ハ廣亦大ノ兩用ヲ持シテ居ル故「亦大亦乗」ノ一体兩用ノ持業釈ノ義ナリ。サテ次ニ「或乗大聖故名大乘」⁽⁶⁾ト云ハ后ノ釈テ此ニ二解分ル、中先ツ有財釈ヲ以テ解スル寸ハ「大乘」ト云カ大ハ真如ノコト真如ハ諸法ノ性体ナレハ大性ト名ル。ソコテ「大」ト云カ真如ノコト六度万行ハ此真如の大性ニ乗スル故、行ツキヒタ処ロカ涅槃ヲ証ルナリ。此トキハ六度万行ハ能乗ナリ。大性タル真如ハ所乗ナリ。ソコテ此大乘ノ乗ノ字ハ能乗所乗ノ中テハ所乗ノ真如ノコト、ソコテ大モ真如

〔十七丁右〕

ノ名トナリ乗モ所乗テ真如ノコトニナル。夫ヲ他ノ六度万行ノ名ニスル故、有財釈ニナルノナリ。モトノ名ハ真如ノ名ナレトモ夫ヲ六度万行ノ名ニシテ大乘ト名ル。ソコテ「作法」ト云ハ此六度万行ハ真如ノ大性ヲ以テ所乗トスルカ故ニ、此万行ヲ大乘ト名ル。扱次ニ依主尺ノ解テハ大ハ真如ノコト乗ハ万行ノ名トナル。此トキハ乗カ能乗ノ名ナリ。ソコテ此六度万行ハ小乗トハ違テ人法二空ノ真如ノ大性ニ乗スル故大性カ乗ノ依主釈ノ義ナリ。如是解スルコトハ『義林章』^(義林)「諸乗章」一末廿五右ニミヘテアル。⁽⁷⁾此中有財ノ解ハ慈恩自ラエラヒ捨テアル。ナセナレハ此有財ノ解ノトキハ乗ヲ所乗トスル真如ハ无為常

「十七丁左」

住ナモノテ運載ノハタラキハナキユヘ乗ヲ真如ノ名トスルハ親シカラヌ故、乗ヲ能乗トシテ万行ノ方ニ属スル依主ノ義カ勝ル、ト申シテ有ナリ。次ニ五蘊⁽⁸⁾トハ、五ハ数ノ名、蘊ニハ四義アリテ、一ニ「積聚ノ義」、二「分際ノ義」、此ハ『中弁論』中七右及「俱舍〔論〕」第一卷ニハ第三義ニナリテアル。三「俱相應大」ノ義、此ハ『対法疏論』二十六右。四ニ「荷負重擔」ノ義、此ハ『対法論』第三義、『俱舍〔論〕』テハ第二義ニナリテアル。トキニ此第四義ノ中今論ハ下モニ第一義ヲ奉ルユヘ第一義ヲ以テ解スヘシ。下ノ文第八左ノ文ニ「以積聚義說」等ト此義ハ『瑜伽』五十三卷十六右『顕揚論』五五左カラ初リタ義テ、夫ヲ委クスル

「十八丁右」

コトハ『瑜伽』五十六二八左ニ四義ヲ以テ釈テアル。一ニ「所称体義」⁽¹⁾此ハハ目トヨヘハ目ノ体、耳ト呼ハ其体ノ体、カス／＼ノモノカラノ有ノヲハ、夫ヲ指テ積聚ト名ク。目耳等トヨハレルモノカラノイクツモアツマリタノナレハ此積聚ノ義ナリ。此ヲ『顕揚』十四四左ニハ四義ヲ挙ル中第一ニ「多数ノ義」ト云テアル。又『中弁論』中卷七右ニ三義ノ中ノ第一ニ「非一ノ義」⁽¹²⁾ト云テアル。色蘊ナレハ過現未ノ三世ノ三世ノ色或ハ十一ノ色各々別々ナルモノヲ集テ色蘊トスル故、其色蘊ノ中ニハ過現未ノ色等多数ニシテ一ニ非ス。此ヲノ義ヲモテ積聚ノ義ヲ顕ス。二ニ「互ニ和雜ニ轉スル」義⁽¹³⁾、『顕揚』ノ第三義ニハ「共有轉ノ義」⁽¹⁴⁾ト云カ是ナリ。此ハ色法

「十八丁左」

ノ中テモ色香味解ノ四カ一処ニ顕レタリ。ソノ外心々所々所テモマセコセニ顕レテクル故、此ヲ「積聚ノ義」ト云。三ニ「一類惣略ノ義」⁽¹⁵⁾、『顕揚』ノ第二義ニ「惣略ノ義」ト云カアル。『中弁論』ノ第二義モ同ナリ。此ハ色蘊ノ中テモ「過現未麁細遠近」等ノ差別アレトモミナトモニ色〔ニ〕シテ類ナル故、一ニアツメテ色蘊トスル。四「増益損

減ノ義』『顯(揚)論』モ全ク同ナリ。此ハ集シメ者ハフヘルコトモアリヘルコトモアリ。寄合モノテ无ノハマシマセス、ヘリモセヌケレトモ、今ハ集リモノユヘ、マシタリヘリタリスルト云コトテ積聚ノ義シヤト申スコト心々所起ルコトモアリソレナリ。此四義ヲカケテミルトキハ蘊積聚ノ義明カシ、次ニ論ト云一釈アテ、先『俱舍』一二右ニ『学徒ヲ誡』⁽¹⁶⁾等、

「十九丁右」

此ハ学フ者ヲシテツトメハケマシテ此ハコウシヤ夫ハソフテ无ト識ムル教故、論ト称スルト云コト、又最勝子『瑜伽釈』ハ右「諸法ノ性相ヲ問答シ決択スル故名テ為レ論」⁽¹⁷⁾ト一切諸法ノ有為法ハトウレヤフレハ此道理ト問答決択シテ諸法ノ性相ヲ顯ス故、論ト名ルト云コト、則コノ論ニ「如何色蘊」等ト「如何／＼」ト云ラ一々ニ問答シ玉フ故、ソコテ論ト名ル。此ニ釈ヲ『対法疏』一二二右ニハ一処ニシテ「以三法義以三教授誡勗」⁽¹⁸⁾釈「論名」トアル。サテ此ニ釈『概要』上本十左ニ「『俱舍』ハ「依レ悲衆生ヲ利カ故ニ」『瑜伽』「依レ智」ト問答シテ諸法ヲ決択スル故、二カリニタ分ケニシテアル。又『対法疏』一廿二左ニハ「『瑜伽釈』は依レ法諸法ノ性相ヲ問答シ決択

「十九丁左」

スル此法ニヨリテ論ノ名ヲ立ルノナリ。又『俱舍』ノ「学徒ノ人ヲ教誡スルヲ論ト名ク」故、此ハ人ニ依テ名ヲ立ル故、コレ人法ヲ以テ分ルノナリ。⁽¹⁹⁾各一義ニヨリテ心口相違ナシ。上來三釈オハリテ此ヲ合尺スルニ先五蘊ヲ明スルナル故ニ『五蘊論』ト名ル。ソレニ大乘ノ二字ヲ不分ルト世親撰「大乘」論「釈」一六右『大乘阿毘達磨』ノ大乘ヲ釈シテ「声聞ノ阿毘達磨ヲエラハンカ為ニ、又大乘ヲ舉ル」⁽²⁰⁾ト云テアル。此ニ準シテミレハ今ハ小乗ノ五蘊ニ簡ントシテ実ニ大乘ノ二字ヲ奉タモノナリ。爾レハ論ニ明ス処口ノ色受想行識ノ名目ハ同シヤウナレトモ小乗ノ五蘊ノ義テハナイ大乘ノ五蘊ノ義シヤト簡ヒ玉フ。爾ラハ小乗ト大

〔二十丁右〕

乗トノ五蘊如何遠クト云ニ第四ノ行蘊ニ至テ小乗ニ於テハ十四不相應行ノ実徳アリト立ル。今大乘ハ識心々所ノ名ト云ニ假立シタモノトミヘル。サテ次ノ第五ノ識蘊ニ至リテハ小乗テハタ、六識ト立テ、七トノ二識ヲ立ヌ。爾ルニ大乘今此論テハ第〔七〕末那識、第八阿頼耶識ヲ明シ、心意識ノ三ヲ分レテ建立スル。爾レハ「小乗ノ五蘊論」テハナイ「大乘ノ五蘊論」シヤト簡フ義ナリ。爾レハ五蘊カ論ノ依主釈、又大乘カ五蘊論ノ依主釈、両重ノ依主釈カカ、ルノナリ。此テ題ヲ直解イタスコトオハリ、次ニ通妨トハ如何ナル妨ケカアルソト云ニ問云此論ノ一部始終ヲミルニ五蘊十二処十八界ノ三科ノ法

〔二十丁左〕

門残ル処口ナク説テアル。爾レハタ、「五蘊論」トノミ名ケハ処界ノ二科ヲアマスニ非スヤ。題ハ一部ノ惣標ナルニ何故ソタ、「五蘊論」トノミ名ケテ処界ノ二ヲ現セサルヤ。恐ハ摂法不尽ノ名トナルニ非ヤト云ニ答テ云。此ハナルホト此論ノ中ニ此例ヘニ非ス。則『枢要』上本^{十一}左ニ『成唯識論』ト云立名ヲ解スル六解有ル中ノ第一解ニ此論ヲ『成唯識論』ト名ルハ初ノ所名ニ随テ名トスル^{二十一}アルソノ初ト指ハ『三十頌』初二「彼依^{二十二}識所変」トアルコレカ唯識所変ヲ明ス文ナリ。今ノ『枢要』釈ノコ、ロハ『三十頌』一部□乍ラミナ唯識ヲ明ステハ无レトモ初中后ノ三分ノ中テ初ノ分ニ唯識ト云テ有、故ソノ近キ処口ノ初ノ所名

〔二十丁右〕

ニ随テ名ヲ得タノシヤト云テソノ例ニ「如^{二十三}瑜伽論」ト例ヲ拳テアル。此釈ハ則チ最勝子『瑜伽釈』八左ノ釈ニヨルソノ文ニ「已ニ如是ノ五分アリ。何故ソタ、瑜伽地ト名ルヤ」ト問テソノ答ヘニ初二付テ名ヲ立ツ故ニ失アルコトナシトアル。此文ノコ、ロカ『瑜伽』百卷ニ惣^總シテ五分アリ。初五十卷ヲ一ニ「本事分^地」ト名ル。此中十七地アリ

テ則チ瑜伽ヲ明ス。其瑜伽ト云カ声〔聞〕獨〔覺〕菩薩三帖ノ觀經ノコトナリ。サテ次ニ第五十一卷目より第八十〔卷〕目迄ノ三十卷ヲ第二「撰決摂分」ト名付テ、上ノ十七地ノ中ノ深遠ノ要義ヲ所尋決摂シ玉フ。サテ次ニ第八十一・二ノ兩卷ヲ第三ニ「正积分」ト名ケテ一切諸法ノ義則ヲ略撰

〔二十二丁左〕

シ解釈スル。サテ次ニ第十八〔第〕三・四ノ兩卷ヲ第四「撰異門分」ト名テ、諸經ノ中ニ有処口ノアラユル諸法ノ名義差別ヲ略撰スル。次ノ第十八十五ヨリ終リ第一百卷迄ノ十六卷ヲ第五「撰支分」ト名付ケテ、經律論ノ三藏ノモロ／＼字義ヲ略撰スル。爾レハ『瑜伽』百卷ノ中テ正ク瑜伽師地ヲ明スハ五分ノ中前ノ「本地分」ノ一分ノ五十卷ノコト、爾ルニ一部ノ惣標タル題号ニ何ソタ、一分ノ五十卷ノ間ニ明ス瑜伽師地ノ名ヲ與ルヤト云問ノコ、口夫ヲ釈シテ今「瑜伽師地」ト云ハ近キ初ノ「本地分」ニ付テ名ヲ立タノテ其外ノコトヲ明サヌト云コトテハ无故ニ、妨ケ无ト釈シテアル。今此論ノ名モマタ／＼爾リ。此

〔二十二丁右〕

論一部始終ニ三科ヲ説テソノ説相ノ次第カ、初二五蘊ヲ説、次二十二処、后二十八界ノ、則初ノ蘊ハ略ナリ、次処ハ中ナリ、后ノ界ハ廣ナリ。此ハ『俱舍』一十六左顯レテアル。此略中廣ヲ大乘ニモ用ルコト故、『三科章』ノ十右ニ列テアル。又『対法疏』一五十七右ニ三科ノ法門ノ事ヲ略ト中ト廣トニ依テ諸法ヲ弁釈スルトアル。爾レハ蘊処略ヲ説トキハ是非トモ略中廣ト次第ナリテ略ノ五蘊ヲ先ニ説子ハナラ子ソノ次ニ処界ヲ説ナリ。今ハ其初二随テ名ヲ得テ『五蘊論』ト名ルノテ『五蘊論』ト名ケレトモ五蘊ヨリ外ノコトヲ明ヌ故ニ、『五蘊論』ト名付タノテハ无、タ、初ノ所名ニ随テ名ヲ立ル故、名ニモ妨ハナイナリ。

「二十二丁左」

△「世親菩薩造」⁽²⁷⁾「文字分第」二造論ノ人名世親菩薩ハ此論能造ノ人名世親菩薩ノ名ハ如常。△「唐三藏法師」等此ハ此論反

訳ノ人名此論反訳ノコトハ『開元錄』ノ上ニ唐ノ太宗高帝貞寛二十一年二月廿四日ノ釈出トアル。此ハ天子ハ棒ルトキノ清書ノ年号ナリ。△「如薄伽梵」等第五科「釈本文」此論ニハ序・正・流通ノ三分ハナイナリ。三分ノ有無

ハ其經其論ニヨリテ不完ナリ。此ハ諸師ノ釈例ノコトテ『樞要』上本廿右ニ分別シテ有其中「或ハタ、正宗ノミアリテ序・流通ナシ。如瑜伽等」トアル此カ此論ノ例テタ、正宗分ノミナリ。此論文一部始終大門有。三第一「廣

失五蘊」第二「弁二十二処」此

「二十三丁右」

八九左」下第三「弁二十八界」此八九右已下「初中有二三初舉數列名ニ隨レ別別釈三問答名義」今其初也。今ヨシタ二十八字カ「舉數列名」ト云科ナリ。初ノ八字ハ五蘊ト云數ヲ、次二一ニハ已下ハ五蘊ノ名ヲ列ヌル。又「如薄伽梵」等ト云ハ此ハ經ヲ列テ略舉スルト云モノナリ。「如薄伽梵略説」ト云經ヲ引ナリ。薄伽梵トハ義ヲ以テ反スレハ此ニ世尊ト云。又『廣五蘊論』ニハ「佛五蘊論ヲ説」トアル。⁽³²⁾唐ノ三藏ノ反訳ニハ御經ニ多ク一時薄伽梵トアルナリ。コノ義ヲ釈スルコト『宗輪論述記』十四右ニ「薄伽梵者能破四魔」等トアル。⁽³³⁾此ハ二義ヲ以テ薄伽梵ヲ釈スルノナリ。此

「二十三丁左」

本无性『撰論』一二右ニヨル。⁽³⁴⁾先初ニ「能ク破四魔」ト云ハ五蘊魔・煩惱魔・死魔・天魔、此カ四魔ナリ。如来ハノコラス此四魔ヲ際伏シテコサルユヘ薄伽梵ト名ル。此カ一義、次具ニ「抱无法」ト云ハ『佛地論』一四右ニ述ルコトナリ。⁽³⁵⁾一二自在義、我々ハ諸ノ煩惱ニク、リ付ラレテ自由ナラヌナリ。爾ルニ佛ハ一切ノ煩惱ニ繫属セラレ

又故自由自在ナリ。二熾盛義、御威光サカンニタレモハムカウ者ナヒ。三ニ端嚴ノ義、御威光アレハトテ鬼ノヤウニオソロシイノテハ无三十二相八十種好ヲソナヘテウツクシイ佛ナリ。四名声ノ義、佛ノ御名ハ勝レテ、ヒヤウハニ高ク誰レ知ヌ者ハ无ト云。五吉祥ノ義、方便ヲ記シテ

〔二十四丁右〕

有情ヲ利益スルカコレ夫ホトナ吉祥ナコトハナイ。六尊嚴ノ義、貴キ者ハ佛ケ梵天ニモ无佛ノ御説ヲ頂キニ付テ礼スルト云ヤウナ尊キ御方ナリ。此六義ヲ具スル故、薄伽梵ト名ル。若世尊ト互スルトキハタ、第六ノ一義ノミアリテ前ノ五義ヲ欠故、多含ナル梵吾ノマ、ヲ舉テ「薄伽梵」ト云タノナリ。此義ハ『法華玄讚』一五十七右ニ『佛地論』ヲ列テ釈シテ有ルナリ。⁽³⁶⁾ △略トハ、此略ハ影略ノ義テ、我ノ无身ノ体タノシナノラ五ニヨセテ影略シテ五蘊ト説キ玉フ。セウ略ノ義テハナイナリ。トキニスツト五蘊ヲ説ツラ子テモヨカルヘキニ、ナセニ「薄伽梵」等ノ言ヲオク。ソレナレハ此ハ

〔二十四丁左〕

同作ノ『百法論』ニモ寂初ニ「如世尊説」トアル。⁽³⁷⁾ 爾レハ此ハ氣ヲ付子ハナラヌ。ナセニ如是「如世尊説」「如薄伽梵説」ト説玉フト云ニ、案スルニ世親『撰「大乘」論』一〇右ニ⁽³⁸⁾「若阿毘達磨大乘五蘊ヲ離レテハ論此レ聖教ナルコトヲ了知セス。ソレ故阿毘達磨大乘經ト云」言ヲオクトアル。此ニ準スルニ論ノ寂初ニ「如薄伽梵説」トヨヒカケテ此レ聖教ナルコトヲ顯シ外道ノ説ニ非ルコトヲ示ス。『宗輪論』ノ初ニ「佛薄伽梵入涅槃ノ后」ト云ソノ佛薄伽梵ノ言ヲ釈シテ彼『異部宗輪論』疏〔述記〕⁽⁴⁰⁾十四右ニ「非ニ諸外道故」称ニ教主ニトアルアリ。『宗輪』ノ文別ニタ、佛薄伽梵ノ名ヲ奉タノテハ无、入涅槃ト云コトヲ

〔二十五丁右〕

云為ニ「佛薄伽梵」ト云テアル。右ノ如クニ釈スルカラハ今モマタ／＼爾リ。五蘊ノ説処ロヲ云ン為ニ「薄伽梵」ト云ノナレトモ其処ロニ自ツカラ「非^ニ諸外道^一故称^ニ經主^一」ト云コ、ロカ含テ有ルノナリ。問云ク。此論若瑜伽ノ支分ナリト云ハ、「如^ニ瑜伽説^一」ト云タケ、ソウイモノシヤノニ、何故ソ「如薄伽梵説」ト云ヤ。已ニ「如薄伽梵説」ト云カラハ余ノ佛經ヲ釈スルノテ瑜伽ノ支分ニハ非ルヘシト申スニ、答云「不爾」。已ニ「撰大乘論」ハ『阿毘達磨經』ノ「撰大乘品」ヲ釈シ『雜集論』ハ『大乘阿毘達磨集經』ヲ釈スル。トモニ佛經ヲ釈シタ論ナレトモヤハリ瑜伽ノ支分ナリ。ソレハ如何ト云ニ『対法疏』一五十六

〔二十五丁左〕

左ニ是ハ「解^ニ阿毘達磨經^一」等トアル。爾レハ佛經ノ三科ヲ釈スト云ヘトモ『瑜伽』ノ「本地分」ノ中文義ヲ集メ略シテ述玉フユヘ、ソコテ瑜伽ノ支分ナリ。今モ全クソレト同ナリ「如薄伽梵略説五蘊」ト。

*本研究は、大谷大学真宗総合研究所二〇一五年度一般研究の助成を受けた。心より謝意を表する。また、示唆に富む助言を頂いた方々にも謝意を表する。未公表であつた研究成果の一部をここに提示する次第である。

註

- (一) サンسكريットとチベット語の論書名については、Tsubanhu's *Pañcaskandhaka*, Critically Edited by Li Xuezhn and Ernst Steinkelner with a Contribution by Toru Tomabechi (Beijing/Vienna, 2008) の序文、ならびに同校訂本の書評(箕浦曉雄『仏教学セミナー』第八十九号、二〇〇九年、pp. 98-99) 参照のこと。
- (二) 無性造『攝大乘論釋』(No. 1598)『大正新脩大藏經』第三十一巻を指す。

- (3) 無性造『攝大乘論釋』(No. 1598)『大正新脩大藏經』第三十一卷380b5 参照のこと。この解釈は、窺基撰『大乘法苑義林章』(No. 1861)『大正新脩大藏經』第四十五卷265a3-4 あるこは眞興撰『唯識義私記』(No. 2319)『大正新脩大藏經』第七十一卷350b5 にも無性の言として引かれる。
- (4) 有財釈 (Bahuvrīhi 所有複合語) と依主釈 (Tatpuruṣa 格限定複合語)
- (5) 持業釈 (Karmadhāraya 同格限定複合語)
- (6) 窺基撰『大乘法苑義林章』(No. 1861)『大正新脩大藏經』第四十五卷264c26-27 故無性言。「或乘大性故名大乘」。此唯舉根本。窺基撰『大乘法苑義林章』「諸乘義林」(No. 1861)『大正新脩大藏經』第四十五卷265c12-15 大乘通持業及依主。亦乘亦大。乘於大性是大之乘。無性說故。或不得有財。以大非運故。或以大爲所乘。亦有財釋。
- (8) 蘊の意味については、加藤純章「極微の和集と和合一有部と經部の物質の捉え方」(『豐山教学大会紀要』創刊号、一九七三年、『経量部の研究』春秋社、一九八九年再録)、箕浦曉雄「『俱舍論』における蘊 (skandha) の意味規定」『俱舍論実義疏』・『俱舍注疏随相』研究小史一(『真宗教学研究』第二十五号、二〇〇四年) 参照のこと。
- (9) 『瑜伽師地論』(No. 1579)『大正新脩大藏經』第二十卷593c20 積聚義是蘊義。
- (10) 『顯揚聖教論』(No. 1602)『大正新脩大藏經』第三十一卷546a5-9 又復蘊者此積聚義是蘊義。能善了知是積聚義名蘊善巧。此積聚義復有四種。謂多種義。總略義。共有轉義。增益損減義。此中顯示諸蘊自體及彼障斷勝利是名蘊善巧。
- (11) 『瑜伽師地論』(No. 1579)『大正新脩大藏經』第二十卷546c16-19 如是等類應當分別諸蘊差別。問如說積聚義是蘊義。何等名爲積聚義耶。答種種所召體義。更互和雜轉義。一類總略義。增益損減義。是積聚義。
- (12) 『辯中邊論』(No. 1600)『大正新脩大藏經』第三十一卷470b4-13 且初蘊義云何應知。頌曰。
非一及總略 分段義名蘊
論曰。應知蘊義略有三種。一非一義。如契經言。「諸所有色等。若過去若未來若現在若內若外若麁若細若劣若勝若遠若近」。二總略義。如契經言。「如是一切略爲一聚」。三分段義。如契經言。「說名色蘊等各別安立色等相故」。由斯聚義蘊義得成。又見世間聚義名蘊。已說蘊義。
- (13) 前註11『瑜伽師地論』608c18「更互和雜轉義」参照のこと。
- (14) 『顯揚聖教論』(No. 1602)『大正新脩大藏經』第三十一卷546a5-9 又復蘊者。是積聚義。能善了知是積聚義。名蘊善巧。此積聚義復有四種。謂多種義。總略義。共有轉義。增益損減義。此中顯示諸蘊自體及彼障斷勝利。是名蘊善巧。
- (15) 前註12『辯中邊論』470b9-10「二總略義」参照のこと。

- (16) 世親造 玄奘譯『阿毘達磨俱舍論』(No. 1558)『大正新脩大藏經』第二十九卷 1a29-1b1。對法藏論我當說(第一偈 d 句)、者教誡學徒故稱爲論。
- (17) 最勝子造 玄奘譯『瑜伽師地論釋』(No. 1580)『大正新脩大藏經』第三十卷 885a3-4 問答決擇諸法性相故名爲論。
- (18) 湛慧撰『阿毘達磨俱舍論指要鈔』(No. 2250)『大正新脩大藏經』第六十三卷 821c3-6 俱舍釋言。教誡學徒故稱爲論。即以法義ヲ以教授誡勗釋論名也。初依法名。後依人稱。樞要云。最勝子解依智辨諸法故。俱舍依悲利衆生故。または、以下參照のこと。湛慧撰『成唯識論述記集成編』(No. 2266)『大正新脩大藏經』第六十七卷 22619-26 對法論述記一本二十一云。最勝子等解論名云。問答決擇諸法性相故名爲論。此意釋言。假興實主研究甚深諸法性相宣暢宗要立以論名。俱舍釋言。教誡學徒故稱以論。即以法義教授誡勗釋論名也。初依法名。後依人稱。樞要云。最勝子解依智辨諸法故。俱舍依悲利衆生故。
- (19) 前註18參照のこと。
- (20) 世親造 玄奘譯『攝大乘論釋』『大正新脩大藏經』(No. 1597) 第三十一卷 321c4-5 爲簡聲聞阿毘達磨復舉大乘。
- (21) 窺基撰『成唯識論掌中樞要』(No. 1831)『大正新脩大藏經』第四十三卷 608 參照のこと。
- (22) 世親造 玄奘譯『唯識三十論頌』(No. 1586)『大正新脩大藏經』第三十一卷 60a28 彼依識所變(第一偈)
- (23) 成唯識論掌中樞要 (No. 1831)『大正新脩大藏經』第四十三卷 609c20-22 何故但名成唯識論。答。從初所明爲名。彼依識所變故。如瑜伽論。
- (24) 最勝子造 玄奘譯『瑜伽師地論釋』(No. 1580)『大正新脩大藏經』第三十卷 885a12-13 此論既有如是五分。何故但名瑜伽師地。
- (25) 世親造 玄奘譯『阿毘達磨俱舍論』(No. 1558)『大正新脩大藏經』第二十九卷 5d1-8 由蘊等門作三種說。頌曰。
愚根樂三故 說蘊處界三(第二十偈 c p 句)
- 論曰。所化有情有三品故。世尊爲說蘊等三門。傳說有情愚有三種。或愚心所總執爲我或唯愚色或愚色心。根亦有三。謂利中鈍。樂亦三種。謂樂略中及廣文故。如其次第世尊爲說蘊處界三。
- (26) 慧沼撰『大乘法苑義林章補闕』(No. 882)『正新纂大日本續藏經』第五十五冊 129c9 以下「三科章」參照のこと。
- (27) 『大乘五蘊論』 848b5 參照。
- (28) 宋・元・明・宮内省圖書寮本には「唐三藏法師」とあり、他の諸本は唐の字を欠く。『大乘五蘊論』(No. 1612)『大正新脩大藏經』第三十一卷 848b 註9參照のこと。
- (29) 智昇撰『開元釋教錄／附、入藏目錄』(No. 2154)『大正新脩大藏經』第五十五卷 156c23-23 大乘五蘊論一卷〈見內典錄世親菩薩造第二出與五陰論同本貞觀二十二年二月二十四日於弘福寺翻經院譯沙門大乘光等筆受〉

- (30) 『大乘五蘊論』 848b7 参照。
- (31) 窺基撰『成唯識論掌中樞要』(No. 1831)『大正新脩大藏經』第四十三卷 612b18-19 諸經論中。或唯有正宗無序・流通。如瑜伽等。
- (32) 「五蘊論ヲ説ク」とあるのを「五蘊ヲ説ク」と訂正すべきか。安慧造地婆訶羅譯『大乘廣五蘊論』(No. 1613)『大正新脩大藏經』第三十一卷 850c19 佛說五蘊。
- (33) 窺基記『異部宗輪論疏述記』(No. 844)『正新纂大日本續藏經』第五十三冊 571a13-16 佛薄伽梵。述曰自下第二明本教主後諸弟子諍佛之教非諸外道故稱教主佛如前釋薄伽梵者能破四魔具抱六德名薄伽梵。
- (34) 無性造玄奘譯『攝大乘論釋』(No. 1598)『大正新脩大藏經』第三十一卷 380b18-20 薄伽梵者。破諸魔故。能破四種大魔怨故。名薄伽梵。四種魔者。一者煩惱魔。二者蘊魔。三者天魔。四者死魔。／380b24 能破如是四大魔故。名薄伽梵。
- (35) 親光(等)造玄奘譯『佛地經論』(No. 1530)『大正新脩大藏經』第二十六卷 292a24-26 薄伽梵者。謂薄伽聲依六義轉。一自在義。二熾盛義。三端嚴義。四名稱義。五吉祥義。六尊貴義。また『佛地經論』のこれ以降の「薄伽梵」についての六つの説明をも参照のこと。
- (36) 窺基撰『妙法蓮華經玄贊』(No. 1723)『大正新脩大藏經』第二十四卷 690a26-b6 如佛地論頌。自在熾盛與端嚴名稱吉祥及尊貴。具足如是諸六義。應知總名為薄伽梵者聲也。梵謂具德。若有爲此薄伽聲自能破四魔。必具六德。一自在義永不繫屬諸煩惱故。二熾盛義炎猛智火所燒練故。三端嚴義三十二相等所莊嚴故。四名稱義佛之勝名無不知故。五吉祥義恒起方便利有情故。六尊貴義世出世間咸尊重故。今名世尊闕前五。
- (37) 天親造玄奘譯『大乘百法明門論』(No. 1614)『大正新脩大藏經』第三十一卷 855b15-18 如世尊言。一切法無我。何等一切法。云何爲無我。一切法者。略有五種。一者心法。二者心所有法。三者色法。四者心不相應行法。五者無爲法。
- (38) 世親造玄奘譯『攝大乘論釋』(No. 1597)『大正新脩大藏經』第三十一卷 321b27-28 若離舉阿毘達磨大乘經言。則不了知論是聖教爲此義故。
- (39) 世友造玄奘譯『異部宗輪論』(No. 2031)『大正新脩大藏經』第四十九卷 15a17 如是傳聞。佛薄伽梵般涅槃後。……以下略。
- (40) 前註33 窺基記『異部宗輪論疏述記』「非諸外道故稱教主」参照のこと。

(大谷大学准教授 仏教学)

〈キーワード〉瑜伽行唯識学派、法相宗、世親

